

【氏名】丹羽 崇史

【所属大学院】（助成決定時）九州大学大学院人文科学府

【研究題目】春秋戦国時代における青銅器の生産と流通形態に関する研究

#### 【研究の目的】

春秋戦国時代の青銅器（青銅容器）は、礼器・彝器という性格が考えられ、先秦時代の中国における人々の精神文化が反映された物質文化としてこれまで数多くの研究がなされてきた。これまでの研究では、考古編年や地域間での系統の違いや銘文の個別的な解釈を中心に研究がなされてきた。しかしながら、青銅器がどのような生産体制のもとで生産され、どのように流通したのかを検討したものは決して多くはなく、青銅器の生産体制や流通形態の問題について、いまだに本格的な検討が行われていないのが現状といえよう。春秋戦国時代は、従来より中国史上稀に見る社会変動期として評価がなされている。佐藤武敏氏は、商代以来の職業氏族による生産組織が春秋戦国時代に解体し、官僚組織や民間による生産組織が成立したと位置づけており、この時代における青銅器の生産体制や流通形態のあり方は、所謂社会変動の質的な評価にも影響を与えるのではないかと考える。

#### 【研究の内容・方法】

申請者は、青銅器製作者集団の動向を明らかにし、青銅器生産体制を明らかにするため、青銅器のもつ特徴のうち、範線形態、加強筋、湯口・ガス抜き口、スパーサーなど製作技術に関連した特徴の分析を最も重要視した。具体的には、青銅器の観察記録によってデータを収集し、これらの製作技術に関連する特徴を整理して、時間的・空間的に比較検討を行った。青銅器の中で数量的に最も豊富で、製作工程がおおよそ判明している青銅鼎を中心に分析を行った。助成期間が1年間であったため、今回は長江中流域を中心とした、現在の行政区分で言う湖北省・湖南省・安徽省・河南省南部（便宜的に華中地域と称する）といった地域から出土した青銅器を中心として研究を進めた。この地域では、所謂「楚系」青銅器を中心とした多数の青銅器が発見されているが、これらの青銅器がどのような体制の下で生産されたかは、いまだ不明であった。製作技術に関連した特徴は、発掘報告書に詳細な記載がなされることは少ないため、できる限り実物を観察して把握する必要がある。そのため、申請者は2005年10月25日～11月3日、および2006年2月20日～3月4日の2回にわたり、中華人民共和国へ渡航し、現地の博物館・研究所で資料調査を実施した。前者では湖南省（湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・益陽市博物館など）・湖北省（宜昌博物館など）を、後者では河南省（河南博物院・河南省文物考古研究所など）・湖北省（湖北省博物館・荊州市博物館・荊門市博物館・襄樊市博物館など）を中心に青銅器の調査を行った。また、日本国内において春秋戦国時代青銅器を所蔵する機関で資料調査を実施した。2005年11月28日には東京大学教養部駒場博物館を、同年12月19日には奈良国立博物館

を、2006年3月22日には和泉市久保惣記念美術館をそれぞれ訪問し、所蔵の青銅器の写真撮影・実測・観察記録を行った。

#### 【結論・考察】

申請者の現地での資料調査を経た分析の結果、春秋中期後半以降に江漢地域とその周辺の皖南地域（安徽省南部）や湘北地域（湖南省北部）で、出土する青銅鼎に用いられる製作技術において差異が見られることが判明した。よって戦国時代の楚の領域である華中地域において、青銅鼎の製作技術に複数の系統が存在することを指摘し、各地において青銅器の生産が行われた可能性が高いと考えた。また、春秋期、戦国期のそれぞれの青銅鼎の分布の中心である漢水流域と江漢地域とでは製作技術上共通した点が多いが、湯口・ガス抜き口の設置位置に差異があり、すべてが継承されたわけでないことが判明した。戦国期における製作技術の多様化は、礼制に参加する階層の増加による青銅容器の需要の拡大にともなう生産量の増加、ならびに生産の効率化、地方生産の本格化という背景とも無関係ではない点を指摘した。今後は中原地域出土青銅器でも同様の分析を行い、構築したモデルを鋳型などの資料を用いて検証したい。